

4-9					
主題	特養の所在学区中学生を対象とした学習支援を兼ねた子ども食堂の開設				
副題	大学生ボランティアが公益的取組みの運営と実践に関わる意義				
キーワード 1	子ども食堂	キーワード 2	ボランティア	研究(実践)期間	13ヶ月

法人名・事業所名	社福) 亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園
発表者(職種)	野村雪乃(大学生ボラ)、大内健史(連携事業部部長)
共同研究(実践)者	井村優香(大学生ボラ)、土谷悟史(大学生ボラ)、池田晋平(評議員)

電話	042-579-2711	FAX	042-579-6868
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	神明園は東京西部の羽村市で開園 20 年を迎えた入居定員 120 名の施設である。昨年度に神明園の母体である社会福祉法人 亀鶴会における公益的取組みとして、特別養護老人ホーム 神明園を地域資源として活用すべく学習支援を兼ねた子ども食堂を企画し、2018 年 11 月よりその運用を開始した。
-------	---

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

亀鶴会では 2018 年初頭より、日頃より交流のある神明園の所在する中学校関係者とこの地域が抱える課題について話し合う機会をもち、「経済的理由で塾に通えない」、「テスト期間中は給食がなく負担に感じる家庭がある」、「勉強習慣が身につかない」とのニーズをキャッチした。

そこで、それまで市内には設置のなかった子ども食堂を、学習支援の一環を担える公益的な取組みとして開始することとし、東京工科大学作業療法学科(以下同大学)に学生ボランティアの協力を要請した。作業療法士(以下 OT)を目指す学生に協力を依頼した理由は、OT は近年、医療現場だけでなく地域で活躍することが期待されているためである。これはカナダの OT である Restall ら<sup>1)</sup>が、地域における実践枠組みとして「コミュニティ・オーガニゼーション(以下 CO)」を提唱していることから伺える。CO とはコミュニティグループが共通する問題や改善目標を見つけ、資源を動員し、そのゴールに到達するための戦略を開発・実施することを助ける過程<sup>2)</sup>であり、社会福祉の実現への柱とも言われている。このような流れから、子ども食堂を利用する中学生だけでなく、その運営を中心的に行う OT 学生にとっても、双方が利益を享受できる仕組みを模索した結果、演者らによるこの CO 実践の取組みを開始することに至った。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

OT 学生が CO に基づく地域活動に携わることは、将来、専門職として地域の課題解決に向けた取り組みを実践していくための一助になると考えた。そこで本研究は、OT 学生が CO に基づく社会福祉法人の行う地域活動に参加する意義を明らかにすることを目的とした。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

演者らは同市教育委員会や民生・児童委員と調整を図りながら、子ども食堂を神明台自習室「みらい」(以下みらい)と名づけ計画し、運営を同大学の OT 学生が中心となって進めた。みらい

は中学校のテスト期間中に中学生が利用できる自習スペースを開放する活動として展開し、テスト勉強でわからないことがあれば相談にのるといった学習支援や、昼食・夕食の食事提供を行っている。これまでテスト期間に通算 3 回開催し、のべ 17 名の中学生が利用した。2019 年 3 月には福祉体験会を開催し、神明園の見学を含め高齢者と郷土料理を作る等の交流会を実施した。

#### 《4. 取り組みの結果》

OT 学生が CO に基づく地域活動を実践する意義を明らかにするため、みらいにボランティアで参加した同大学 OT 学生（発表者・共同研究者以外）にインタビュー調査を実施した。対象者は、学習支援と福祉体験会に 2 回以上参加した計 3 名とした。調査は半構造化インタビューを実施し、「活動を通し学んだこと」「中学生から得たこと」「地域への関心の変化」「地域活動を行う意義」について考えや思いを自由に語ってもらった。内容は、対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し、逐語録をもとに質的記述的分析を行い、その結果、4 つのカテゴリーが抽出された。それぞれのカテゴリーとそれを構成したコードの例は以下の通りである。

- ①【OT の専門性を活かせるという気付き】→特養の高齢者と関われる地域環境の大切さ
- ②【地域活動から得た新たな気づき】→住み慣れた地域で活動する重要性の気づき
- ③【地域活動を通して得られた私のやりがい】→高齢者と子どもの懸け橋になりたい気持ち
- ④【地域活動を発展させたい気持ちの芽生え】→地元や全国的にも活動を広げていきたい気持ち

#### 《5. 考察、まとめ》

地域活動に参加した学生は、大学で学んだ OT の専門性が活かせることを気付き、OT が地域で必要とされていることを実感していた。さらに、地元でも地域活動を広げていきたいという思いを抱くことが明らかになった。Leclair らは、地域で実践する OT の専門性として、地域住民の活動とその環境の関係性についての知識や、地域をエンパワメントする能力が必要であると述べており<sup>3)</sup>、参加した OT 学生は、経験を通してその一端を肌で感じていたと思われる。このことから、作業療法学生が CO に基づく地域活動を実践する意義はあると考えられた。

本研究は OT 学生を対象とした分析を中心としているが、みらいでは他大学からのボランティアも数名参加している。彼らの学部の専攻は様々であり、中学生が OT 学生だけでなくそういった大学生と交流することで、将来像のロールモデルを設定するきっかけとしても期待できるため、みらいの活動継続には、他大学そしてなにより羽村市内在住大学生の協力が重要であろう。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

対象者には、事前に研究の目的・方法について説明し、重ねて個人情報の取り扱い、およびインタビュー結果の公表について、口頭ならびに書面にて説明し同意を得ている。

#### 《7. 参考文献》

- 1) Restall G, et al. : A framework of strategies for client-centred practice. Canadian Journal of Occupational Therapy, 70(2): 103-112 (2003).
- 2) 小熊祐子、他：サクセスフル・エイジング, 136-166, 慶應義塾大学出版会, 東京 (2014).
- 3) Leclair L, et al. : Preparing for community development practice: A Delphi study of Canadian occupational therapists. Canadian Journal of Occupational Therapy, 83(4): 226-236 (2016).

#### 《8. 提案と発信》

地域活動の担い手として大学生が関わることは、学びを深め地域で必要とされている気づきとなりえる。地域活動は地域のニーズに合った活動を行い、地域の人々でその活動を支えることが重要である。今後は民生児童委員や PTA との関係性についてもさらに深めてゆく必要がある。